

## ②1 山のテング、里のテング

河和田でテングが住んでるのは、奥山のいかい木のあるところやと。

福井の西別院が、お寺をたてるんで、寺中の善兵衛どんの山の木を買いにきた。なんせ古い庄屋さんの山やから、木もりっぱなもんや。木こりが山の中に小屋をたてて、そこに寝とまりしながら木をきる事になった。

でも、そこはテングのすみかやった。自分の家をこわされると同じで、反げきに出た。

夜になるとの、テングが大ぜいでさわいで、木こりを寝られんようにしたんやと。

これにはホトホト困ってしもの、憶念寺の年よりのごえんさんに相談した。

どれどれと腰をあげたごえんさんが、木こりといつしよに山に泊つたら、ごえんさんについている



仏さまのおかげやろか、ほの時だけはテングも静かにしてたつて。

小坂のテングは、木を切る音を出して、おどかしたんや。

昔は、村はずれの山の端は家なんて一軒もなかった。日がくれて、山仕事のおっさんが山の端におりてきた。ほしたら、とちゅうでカーン、カーンで、斧で木の根っこをたたいて、ほれからのこぎりでもをゴシゴシ切る音がして、目の前にドサツと木がたおれてきて通れんようになってしもうた。

おっさん、まっ青になって、木の枝かきわけてすつとんで帰った。ほやけど、ね床ん中であら考えたら、あんなところにほんないかい木はなかったはずや。

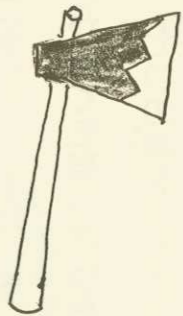
夜が明けて見に行ったら、木の葉一枚落ちてなんだと。

こんどは六十年前のこと。戦争にまけて食べるものも不足してたんで、友達が山の木をきって段々畑を作った。



もういっぺんさがしに行ったけど、見つからなんだ。

そのあと、何べんもさがしたけど、やっぱり見つからなんだと。



別司の向い山（八幡山）には、たいこをたたくテングさんがすんでるんやと。

おばはら三人つれだって、わらび取りに行ったらの、下の方から「オウイ、オウイ。」って呼ぶ声がある。てっきり仲間や思ってた。

「早うあがっといいで、いっしょに一服しようさ。」ってよばったんやけど、少しも上へのぼって来ん。

「オウイ、ワッハッハッハ。」と笑うばかりや。

「ごりやテングさんが出たんや。」もうおそろして、下にもおりられん。横の方へにげたんや。

これは昭和も中ごろのお話や。

テングは里にもおりてきた。

テングが家に入ると、その家は栄えるし、人間につくと知恵をもらえるんやと。

ほんでも運がわるいと知恵とられてしまうこともあるらしいんや。

北中の善右衛門どんは、テングが入ってから急に運がよくなったんやと。

ここに子守りに来た娘には、テングがとりついていたらしい。テングはこそつと家の中に小石をまいたんにやといの。誰もなあもせんのに、急にいつから板の間に小石がポトンと落ちてくる。あれつと板の間の方をみると、台所の方でポトン。家じゅうさがしてもだれもえん。家のもんはびっくりしてもて、夜も寝んと番をした。ほしたら電気がふっと消えて、しばらくしたら、また明るうなった。

ほしたらの、こたつで寝たことどもの顔にそりや立派なひげがかいてあったといの。みんなはなんとも気味わるうて、頭からふとんをすっほりかぶってねたんやと。

これは昭和二十六年の冬のことやで。落ちてきた小石は、箱に入れて、いまも善右衛門どんに大事にしまつてあるとか。